

住民と地域外部者との交流と作家の居住の関係について

宮崎大学大学院 学生員 高村 恵多

宮崎大学工学部 正会員 吉武 哲信

1. はじめに

著者らは先に、農山村地域においてはハード的地域振興策だけでなくソフト的施策も重要であるという認識から、外部参入者として独特の価値観を持つ作家に着目し、彼らが定住することと関連した地域住民の意識変化について検討を行なった¹⁾。ただし、この外部参入者については新規定住者のほかに、半住者、漂住者があり、彼らも農山村地域での活動主体や町づくり主体になりうるということが指摘されている²⁾。農山村地域における作家の定住は、作家自身が外部参入者となるだけでなく、彼らに関連した半住者・漂住者の発生や、また半住者・漂住者と住民との交流の形成を誘発する可能性も考えられよう。

そこで、本研究では作家の存在と関連した半住者や漂住者の存在や、彼らの地域内での活動内容についての調査分析を行なうものである。具体的には、新規定住した作家と関係した半住者・漂住者が集まる可能性の高いイベントにおいて、来訪者を対象としたアンケート調査を実施し、住民との友人関係の形成と作家の存在の関係の分析、イベント来訪者の特性分類を行なうこととする。

2. 調査の概要

対象地域は先の研究と同じ宮崎県東諸県郡綾町である。同町は、昭和48年より作家をキーにした町づくりを行なっている。対象としたイベントは、工芸コミュニティが主催する綾工芸祭りで、今年で15回目を迎える。客層は既に定着していると考えられ、作家が関係する半住者・漂住者の存在を知るため好都合である。アンケートは、平成8年11月23、24日にイベント会場において、インタビュー方式で綾町外からの来訪者に対し実施した。

アンケート項目の概要を表-1に示す。半住者・漂住者となる契機となりうる綾町の良さに対する認識の有無、綾町存在の友人の有無とその交流形成のプロセス、綾町民との交流に対する積極性、およびそれらキーワード：作家、交流、地域外居住者

連絡先：宮崎市学園木花台西 1-1 宮崎大学工学部土木環境工学科 Tel. 0985-58-2811 Fax. 0985-58-1673

と関連する個人属性とイベントへの来訪頻度を問うものである。回答者の属性を表-2に示す。回答者数129、有効票数122、有効率は94.6%である。また、回答者には女性の割合が高いが、これはアンケートがインタビュー形式のため、調査協力を了承してもらえり時点で、サンプルに若干の偏りが生じたものである。ただし、現地において確認した限り、来訪者は40代、50代の女性の割合が高く、母集団から著しく偏ったサンプルではないと判断される。また、図-1に回答者のイベントへの来訪回数のヒストグラムを示す

表-1 アンケート項目の概要

個人属性	性別、年齢、居住地、職業
来訪頻度	目的別来訪頻度、イベント来訪回数
価値観	綾町の良さの認識（自由回答）
綾町での友人形成	対象地域の作家と住民の友人の有無、交流の内容（例、挨拶をする、会話をするなど）
友人関係の順	作家と住民の交流順序と交流方法
綾町での交流積極性	綾町民との活動意向（例、現在活動している今後活動したいなど）、活動の内容（例、町づくり活動、環境保護活動など）

表-2 個人属性（性別、年齢クロス表）

年齢	男 性	女 性	合 計
10代	0 (0.0%)	1 (1.2%)	1
20代	4 (10.0%)	9 (11.0%)	13
30代	5 (12.5%)	12 (14.6%)	17
40代	10 (25.0%)	29 (35.4%)	39
50代	14 (35.0%)	22 (26.8%)	36
60代	6 (15.0%)	8 (9.8%)	14
70代	1 (2.5%)	1 (1.2%)	2
合 計	40人 (100.0%)	82人 (100.0%)	122人

注：カッコ内は男女別合計に対する割合

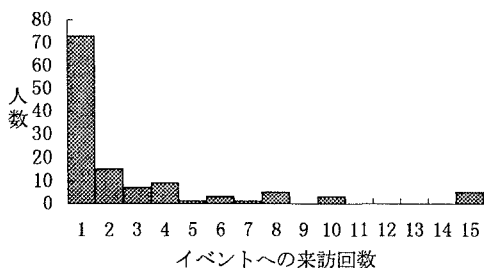


図-1 イベントへの来訪回数

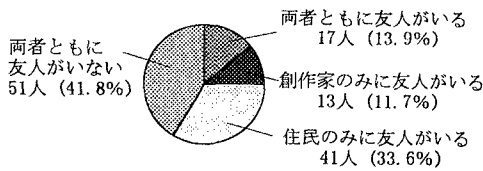


図-2 綾町在住の友人の存在

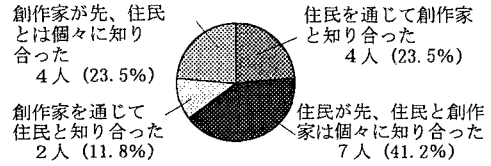


図-3 綾町在住の創作家、住民の両者に友人を持つ人の交流形成の順と内容

表-3 来訪者の回答に基づくカテゴリーの分類

	クラスター1	クラスター2	クラスター3	クラスター4
カテゴリー	- 両方ともに友人いる - イベント来訪回数10回以上 - 綾町民と現在活動している	- 創作家のみに友人いる - イベント来訪回数5～9回	- 両方ともに友人いない - イベント来訪回数2～4回 - 綾町民と活動したくない	- 住民のみに友人いる - イベント来訪回数1回 - 綾町民と活動したい

が、1回と回答した人が59.8%(73人)と多い一方で、3回以上と答えた人も27.9%(34人)あり、工芸祭りにリピーターが存在していることが指摘できる。

3. イベント来訪者に関する分析

(1) 住民との友人関係の形成と創作家の存在

綾町内在住の友人の有無を問った結果を図-2に示す。回答者全体の58.2%が綾町在住の友人を持っており、町内居住の創作家と住民の両方に友人を持つ人は全体の13.9%(17人)である。さらに、住民、創作家双方に友人関係を持つ回答者に対し、「後で知り合った人とは、先に知り合った人とお付き合いを通じて、知り合われたのですか」という質問を行なった。結果を図-2に示す。創作家、住民の両者に友人を持つ17名のうち、一方を通じてと答える人が6名存在する。また、図-3に示すようにこの6名のうち、創作家を通じて住民と知り合った人が2名存在する。

これらから、町内では創作家、住民ともに町外居住者との交流が形成されており、中には、創作家の存在があって初めて形成された交流が存在することが明らかになる。特に、創作家を通じて住民と知り合った町外居住者は、住民と一緒にお酒を飲むような深い交流を行っており、興味深い。

(2) イベント来訪者の特徴の分類

イベント来訪者の特徴を見るために、イベントへの来訪回数、友人の有無、綾町在住の住民や創作家との活動意向に関する3項目で、数量化Ⅲ類ならびにそれに基づくクラスター分析を行なった。クラスター分析は数量化Ⅲ類適用の結果、累積寄与率が50%を越える3軸までをとって行なった。分析の結果を表-3に示す。各カテゴリーは大きく4つに分類できる。すな

わち、クラスター1にはイベント来訪回数、活動意向、友人すべての項目に最もポジティブな回答を示すカテゴリーが属する。これらに反応した人は地域の活動主体となっており、半住者、漂住者もここに属すると考えられる。クラスター2は創作家とのみの交流を中心とした層、クラスター3は住民、創作家双方に友人を持たないことから、工芸作品購入を目的とした層を示すといえる。クラスター3に属する回答者は、町民との交流には消極的である。クラスター4は、来訪回数が1回で住民のみに友人を持つことから、新規来訪者であるが、町内で活動意向があり、将来は地域の活動主体となるポテンシャルとしての層と考えられる。

以上より、綾町のイベント来訪者と町内居住者の間には既に様々な友人関係が形成され、中には町づくりに関連した活動を行っていたり、新たに活動を望む人々が存在しているといえる。彼らの中には、既に半住者・漂住者となっている者や、今後、それらになりうる者も存在していると考えてよいだろう。

4. まとめ

本研究は、農山村に居住する創作家と関係した外部参入者の存在とその内容を明らかにするために、イベント来訪者を対象に、彼らと住民との交流および創作家の居住の関係を明らかにしたものである。今後は、創作家が多く居住する他の地域においても、同様の調査および分析を行ない、それぞれの地域性とともにより一般的な傾向を明らかにする予定である。

<参考文献>

- 1) 倉員圭子ほか：農村で定住する創作家と地域コミュニティの関係に関する基礎的研究、土木計画学研究講演集19(2)、pp.597-600,1996.
- 2) 岡田典夫ほか：外部者の参入が山村過疎地域に与える活性化効果に関する研究、土木計画学研究講演集13、pp.161-168,1990.